

男のコとオトコの娘と

東雲エリン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある理由で男のコでありながらオトコの娘として女子校に通うことになってしまった主人公奏海と愉快な？クラスメイトたちとのスクールライフのお話。

目次

オトコの娘とスクールライフの始まり	1
オトコの娘と放課後事変	10

オトコの娘とスクールライフの始まり

春、桜の舞い散る中ボク、神薙奏海（かんなぎはるか）はこれから通う学校の制服に身を包み歩いていた。

つい最近まで諸事情により孤児院で過ごしていたからかこういう雰囲気は懐かしく感じた。

そしてその学校の前にたどり着いた

『星園女学院高等部』

そう、名前の通りここは女子校だ。

この学校の制服はブレザーとスカートだ。

否、問題はそこじゃない。

問題にすべきは”ボクの性別が男である”ことだ。

× × 始業式が終わり生徒達は各クラスへ別れる
なぜ入学式ではないかと言うとボクは途中編入学したからだ。

今は担任である仲西先生に連れられて教室に向かっていた。

「神薙、君はどうしてこの学校に編入したんだ？」

「最近まで孤児院ぐらしだったんですけど神薙家に養子として迎えられてここに通うように言われたので……」

まんま事実である。ボクが男であることを除いて。

「そか」

素っ気ない返事が返ってきた。そのあとに何か考え込むような顔していた。そして

「神薙、君もしかして……いや、まさかな」

思わせぶりなことを言われた。そのあとになんでもないと言われたが性別のことを見抜かれたのかと思つて変な汗をかいてしまった。

「ほい、ここが君のクラスな。んじゃ行くぞ」

ガラララララ

「ホームルーム始めるぞー席着けー」

雑談していた生徒達が席に着く。

「まず転校生の紹介な、神薙自己紹介よろしく」

すつと一歩前が出る

「はじめまして、神薙奏海といいます」

黒板にチョークで名前をスラスラつと書く

「こう書いてかなたと読みます、かなみではないので」

普通に自己紹介をしていただけなのだがなんか教室がざわついていた。

「待ってすごくかっこよくない?!」

「うんうん、なんか中性的な感じいいね」

なんか反応に困るな……なんか言った方がいいのか

「はいはい、静かにしろー神薙自己紹介はそれだけでいいか?」

「はい。ボクからは以上で……あ」

やってしまったあああ!! 一人称は私だろうが、ボクは馬鹿か!!

「その容姿でボクっ娘だなんて……ぐはあ!」

なんかどつかで勝手に吐血してる人がいたが気にしないことにした。

というか別に誰も気にしてなくない?

「ん、じゃあ空いてる席着け。そだな奏倉の隣でいいか」

え? 奏倉? まさか……

「ふえ?! か、奏海……なの?」

教室の後方で困惑気味な明るい声音が響く

茶髪セミロングを後ろで1本にまとめた少女は大きな黒い瞳に驚きの色を浮かべていた。

「まさか來那が通ってたなんてね、これからよろしくね」

奏倉來那(かなくららな)。ボクが孤児院に入る前からの幼馴染だ。つまりボクが男であることを知っているはず。

「奏海、ホームルーム終わったらちよつと来て」

あ、これまずいなどか思ってたら通路を挟んでとなりの席に座る赤みがかかった茶髪をポニーテールにしてる生徒に肩をつつかれた。

「らなちよつと焦ってるように見えたけどなんかあるのー?」

いきなり核心を突くようなことを言われる。ちよつとこの学校の人たち怖い!

「まさか……百合?」

「いや、それは無いよ」

掠りもしてなかった。ただの脳天気な子だった。

「そっかー。まあ、いいや私は遊佐彩加(ゆささいか)ねよろしくな
みん」

「あ、うん。彩加さんねよろしってボクの自己紹介聞いてた?ボクの名前かなたって読むんだけど……」

「まあまあ、それはいいってことさ」

て、適當すぎる。

そんな噛み合ってるのか噛み合っていないのかよく分からないやり取りをしている間にホームルームは終わりを迎えた。

「奏海!ちよつといい?」

「あ、ふえ?!ちよ、まっつて」

ボクは來那に引きずられて教室の外へ連れ出された。

「で?どういう事なのか説明してくれるのよね?」

ボクより少し低い身長 of 彼女が瞳をのぞき込みつつ聞いてくる。

これは嘘つけなさそうだなあ……

「ほらボク8歳の時に孤児院に入ることになったでしょ?その後ずっとそこに居て最近神薙家に養子として迎えられたんだ」

「それでなんで女子校に来ることになるのよ!奏海は男の子でしょ?バレたら一発退学だよ?それで済むかも怪しいよ?!」

「あーうん、ボクの養父さんが孤児院のボク写真を見て何故か知らないけど女の子と勘違いしてたみたいなんだけどそのまま養子として女の子のまま来ることになっちゃってね……」

來那はまたしても啞然としていた。そりやそうだよね、だつて性別確認せず見た目だけでボクを女の子として養子に迎えたわけだし。おかげで女の子として振る舞う練習するの大変だったんだから、というのはまた別のお話である。

「そりや大変だったね、としか言えないね」

「全くだよ」

「そっか、じゃあこの私が奏海の性別がバレないようにするために協力してあげる」

「すごく魅力的な提案だった。学校内に味方がいるのはとても心強い、のだが」

「でも來那って昔からイタズラ好きじゃ……」

「バアン!!」

來那が壁ドンしてきた。顔が笑っているが目が笑ってなかった、むしろ目が死んで…ゲフンゲフン

「その事はこの学校の人たちには秘密にしてるの！私は品行方正容姿端麗の清楚系として通ってるんだからね！」

「いや、だからね！と言われても……」

「いや、容姿はまあ、悪くないかもしれないけど品行方正な要素はなくて……いや、なんでもないよ」

「ここは大人しく従った方がいいと本能が警告してる。」

そこに闖入者が現れた。

「やつと見つけた！奏海さん！ちよつといいですか？」

声をかけてきたのは來那と同じぐらいの背に腰まである黒髪ロングを揺らしながら歩いてくる生徒だった。

よく見ると制服の襟に銀色の若葉のピンバッチが付いていた。これはこの学校の生徒会に所属する人が付けていると朝仲西先生に教えられたがすっかり忘れていた。

「私奏海さんのクラスメイトで生徒会副会長を務めています時雨麗（しぐれれい）といいます、少しお時間いいでしょうか？」

「定年な言葉遣いだった。どこぞの幼馴染のいう品行方正はまるでゴミのようだ。」

「あのー時雨さん？今は私が！奏海と話してるんですけど？」

「あら、奏倉さんいらっしやったのですか？気づきませんでした」

「怖っ！そんなこと言う人初めてだよ！」

「てか來那の方を見向きもせずボクの方を注視してるし……」

「あら、そう……とりあえずこっちを見て話してください、ねっ!!」

來那の手が時雨さんの顔に伸びる。物理的に向かせるつもりらし

い。

「ふふっ、甘い！甘いですよ！私には一度見た技は通用しませんよ！」
言葉の通りその手をひらりと身を踊らせ躲してみせた。

おお、凄いな……っつてそのセリフおかしくね？

「時雨さんはどこぞ聖闘士なのか……」（ボソツ）

聞こえるかどうか怪しいくらいの小声で言ったはずの言葉だったのだが

ピキーン！

そんな擬音が聞こえて来たような気がした。

「ままま、まさか奏海さんにこのネタが通じるなんて！私の目は間違っただけだった！私と同じ臭いがしましたもの！」

ええー！なにこの急展開。てかこの人今私と同じ臭いとか言いましてよね?!?どういうことなのさ!?!

「今しがた奏海さんは聖闘士なのかってボヤきましたよね?いやあ、まさか今どきの女子高生の中に知ってる人がいるなんて思いませんでしたよー」

今度は一気に話が進んでいく。というか途中から聞き取れないくらいだった。

一方の來那も啞然としていた。

そしてボクは理解した。

この人、時雨麗はー

「時雨さんって重度のアニオタ（オタク）なんですか（ね）」

來那と発言が被った。てか來那も知らなかったのか？

「はうっ！私としたが……んん、みつともないとところを見せました、が私はオタクなのは認めましょう」

いや、そもそもその発言がみつともないからね。

というか女子校でもそういうのがあるんだなあと改めて思った。

ボクとて正体は男の子だ。故にアニメとか特に戦闘シーンのあるものは好きだった。

理由？それは聞いちやダメだよ、男の子にはそういうのが好きになる時期みたいなのがあるのよ。

ってボクが言うと言説力ないよなあ……

「ええと、奏海さん？ 感傷に浸ってるみたいですけどよろしいですか？」

「は、はひい!!」

「いや、よくないでしょこれ……」

來那……フォローのつもりだろうけどそれだとボクが情緒不安定な人みたいに聞こえるよ。

「い、いえ、大丈夫です。それで要件は何でしょうか？」

「あ、うん、実はね奏海さんに生徒会に入っていたいただきたくて勧誘にきました!」

「え?」

「生徒会に入って……」

「2回言って欲しかったわけではないです」

「奏海は理由が知りたいんでしょ? 私も気になるし早く教えてよ」

「理由? 奏海さんもしかして仲西先生から何も聞いてないんですか? 教務の方からの推薦なんですよ?」

「え?」

「教務の……」

「それはわかったから!」

「推薦の理由は編入試験の成績です、奏海さんは我が校の編入試験科目である国語、数学、英語全ての教科で満点しかも面接での評価も最高レベルでした、それが理由です」

「うそ! か、奏海って頭良かったんだ……」

馬鹿にされてる感凄いなあ……だってあれは……

「だってあれほとんど一般常識と基礎的な問題だけじゃないですか」
真顔で答えた。

それに対して時雨さんの顔が青ざめていた。

「う、嘘でしょ……あれが……常識ですって……」

え? まさか、この学校って馬鹿学校?

「あれはうちの3年生にやらせても全部満点取れないのに!」

上級生なにしてんだー!!

「まあ、それは置いて、生徒会の方はどうでしょか？」

「うーん……ちよつと考える時間が欲しいかな、1週間以内には返事させてもらうでダメかな？」

「ええ、構いません。未来で待ってるよ」

「古い！古いよそれ！」

「きゃー時をかける少女が分かるなんてもう最高！私君とはずっと語り合えるかもおー！」

妄想爆発

「……奏海行くよ」

「う、うん」

流石にどうしようも無くボクらはその場を立ち去ることにした。

暴走オタク副会長を置き去りにしてボクらは帰りの支度を整えて下校の準備をしようとしていた。

外には帰宅する人、雑談してる人、準備をする運動部の人様々な人が見える。そこでふと思った。

「ねえ、來那って部活はどうしてるの？」

「あ、うん、私の部活は活動してないから気にしないでいいよ」
返事がおかしい。活動してないなら部活じゃないじゃん。

「ていうのは冗談で、私は文芸部よ。部員は幽霊部員の3年生3人と私だけ、つまり活動してないってこと」

それは暗に自分も幽霊部員だと言いたいのだろうか……

「そっか、部活かあ……ボクなら何が向いてるのかなあ……」

「陸上部なんていいと思うぞ!!」

不意に底抜けた明るさの聲がボクの真横から聞こえた。てか近いよ、声大きいよ。耳痛いじゃん……

横を向くとそこには女の子としてはだいぶ背が高くうっすら青みがかった黒髪を団子にした生徒がいた。牙つて言われても信じちゃいそうな八重歯が一言二言喋るたび覗いていた。

「およう、めぐちゃんまだいたの？」

「ああ、忘れ物しちまってなー」

女の子らしくない喋り方をするこの子だなあ……

「んで、奏海もし部活決めてないんなら陸部どうだ？オレは歓迎するぜ」

一人称オレ?!なんかボクよりよっぽど男の子っぽいよこの子！

「いやあ、奏海の脚凄くいい脚なんだよなあ、お前絶対足速いだろ？」

そもそも男の子ですからね……運動も苦手な方ではないし。

「ああ、そうかもね……あんまり本気で運動する機会もなかったからわかんない所あるけどね」

「そかーんま、来るならオレに声掛けな」

忘れ物を回収した少女はたたたと教室の入口までかけていく

「いい返事待ってんぞーじゃな！」

と言い残し走り去った。まるで嵐のような子だった。

「あ、名前聞きそびれたなあ……」

ボクのボヤキを聞き取ったのか來那が喋り始める。

「あの子は夏芽めぐ（なつめめぐ）、陸上部のエースで中学の頃は全国大会まで行ったこともあるぐらい凄いのよ」

「へえ、凄いね陸上一筋なんだなあ……とここであのしやべり方はー」

「わかんない」

「即答?!」

まあ、人それぞれだよな！ほらそう思えばボクだって……ボクだって……うん、無理があったね。

「帰ろうか」

「うん」

今日はこの後何事もなく帰路につくのであった。

途中で來那と別れ神薙の家に無事帰宅した。

そのまま与えられた自分の部屋に向かい荷物を置きベットに身を沈める。

「疲れたなあ……でも楽しかった、かな？」

ボクの波乱の女子校生活はまだ始まったばかりだ。そして思うこ

とはたくさんあった。

「女子校つてもつとお淑やかな人が多いイメージだったのになあ」

そう、そんなイメージは完全に崩れ去っていた。主に今日出会った4人のせいである。

でもお陰で楽しそうとは思えた。

「上手くやらなきゃね」

ふと呟く。

どんなに上手く女装してもボクが男の子であることは変わらない。上手くやっっていくということは彼女たちを騙し続けなければならぬのだ。

ほんの少しの不安と明日からの本格的な学校生活に期待を抱きながらボクの意識は深い眠りへと落ちていくのであった。

オトコの娘と放課後事変

午前5時半、奏海の朝は早く既に身支度をおおよそ済ませていた。父親は単身赴任しており不在、母親は既に仕事に出ている。けれどこの家にはもう一人同居人がいる。

自分の隣の部屋のドアをノックしそつと開ける。

「……穹？起きてる??」

「んー今起きたところだよ」お姉ちゃん」

寝起きだから仕方がないが寝巻きは乱れており長い茶髪もボサボサだ。

彼女は神薙穹、ボクの妹だ。

そして穹はさっきの発言のようにボクがオトコの娘でお姉ちゃんを演じているなんてことを知らないのだ。

「朝ごはんなあに?」

身支度をしながらボクに問いかける穹。

ボクのことなんてお構い無しで服からチラチラ下着が完全に無防備だ。

ボクは少しだけドキドキしまう、いやほんとに少しだけだよ?

まだあどけなさの残る顔立ちに微笑みを浮かべれば八重歯が覗く

「今日は洋食だよトーストとかポーチドエッグとか」

「おお、いつも悪いね」

どこの夫婦のやりとりだよ……

そんなやり取りをしているうちに穹の支度も終わったようで席につく。

「いただきます」

朝食を食べ残りの身支度を済ませて学校へ向かう

こうして神薙家の朝が否、ボクらの1日が始まるのだった。

学校に向かう途中今日は穹と共に歩いていた。

「お姉ちゃんはまだ学校慣れた?」

「うーん……まあ、慣れた、のかな?」

初日から色々なことがあった。

けれどその出会いは逆にいきなりぼっちとなる案件の回避が出来たわけで良かったと考えるべきだろう。

穹の方はもう慣れてるの？と聞き返したところ……

「同じ中学だった子とかも多いからね、普通に慣れたかな〜」

「そっか……やっぱり女の子同士で星園に進学することが多いのー」

「おはー穹ちゃん」

「あ、うん。おはよちづちゃん」

会話の中にいきなり割り込んできたのは穹の友達で国立千鶴……だったかな？

ボクも彼女とは既に面識があるがまるでいないように扱われている気がしていた。

恐らく彼女には敵視されているのだろう穹の中学の頃からの友達でいきなり出てきた姉というものに納得いかないのだろう。

「穹、先いくからね」

ボクは早足で学校に向けて足を進める。

ボクはそのまま一人で歩いていき昇降口で上履きに履き替え教室へ向かった。

ガララッ

「おはよ奏海」「おはようございます奏海さん」「おはー」

口々に挨拶をしてくるは昨日お話ししたりした面々だった。

その中から一人とととかけて来る影があった。

生徒会副会長の時雨さんだろう。

「奏海さん、昨日のお話受けるかどうかお決めになりましたか？」

「あーうん、もうちょっただけ考えたいかな」

「ふふふ、待ってますのでいつでもいいですよ」

生徒会入りの話は悪い話ではないけどいろいろな場所に出るということは正体のバレるリスクがそれだけ高まるということにもなるのだ。慎重になるのも無理はないはずだよな？

「奏海ー今日の放課後空いてる？」

今度は後ろから声が掛かる。

來那だった。昨日一緒にちゃんと話したいって言って言ってたはずだ。

「いいけど場所はうちでもいい?」

「大丈夫よ」

「らなちーとかなみん遊ぶの? いいなー」

ボクと來那の話に割り込むのは彩加だった。

「うーん、でも今日はちよつと無理……かな」

「ごめんね遊佐さんこの埋め合わせは必ずするから」

おそらくボクの昔話とこうなるまでの経緯などを話すことになるだろうから彼女がいるとボクのことが見えちゃう。彩加さんには悪いけど断る引かなかった。

「そつかー。じゃあまた今度ねー」

少しばかり気が沈んでいたような気がした。

いや、いつも通り何だろうか?

彼女のことはよくわからないところが多かった。

この数分後先生が来てホームルームが始まり授業も始まった。

数時間経った昼休みー

「あー疲れたあ」

「ちよつと來那そんなだらしなない格好でそんなこと言わないでよ……」

「まるで仕事に疲れたオッサンね」

「はあ?!ちよつと今のはおかしくない?!」

とまあ、なんだかんだ賑やかな昼休みだった。

ボク、來那、時雨さん、彩加さんの4人で昼食を摂っていた。

「そういえば次の授業英語だったよね?小テストやるとか言ってたよ
うな……」

「なっ……それはまずいね」

え?なんかやばいこと言ったけ?

「英語の先生小テストで半分以上点が取れなかった人は居残り勉強させるのよ」

「そうそう、それで奏倉羽さんはほぼ毎回居残り食らってたのよね？」
「ちよつと、なんであんなそれ知ってるのよ?!」

ははは……

まずいって來那が英語できないからまずいってことだったんだね
……

「しようなないなーらなちー私が教えてしんぜよおー」

「お?まじで!頼む!」

來那が珍しく変に突っかかることなく話に乗っていた。

もしかして……

「奏海さん気づきました?実はですね遊佐さんかなり勉強できる方なんですよ?文系だけは」

その最後の一言なんか悪意ありませんか?

しかし以外だった彼女があまり勉強できるというイメージはなかった。

なんかこうね、ほら、バカっぽいキャラしてるしき。

「いーい?今回の小テストは5W1Hの使い方が出るからー」

彩加さんはちゃんと教えていた。一方教えられる側はどうかという……

「ふえ?!なんでそこがこれになる?え?」

驚くほど理解してなかった……

これたぶんできる出来ないってレベルじゃないんだらうなあ……
としみじみ思っていた。

× ×

授業は滞りなく進み放課後となった。

昼一緒にいた3人のうち時雨さんは生徒会の仕事があるらしく先
にいなくなっていた

そして英語の小テストはどうなったかという……

「ねえ、見て奏海!半分ぴったりで合格!いえーい」

いや、それあと1問でも落としてたら不合格だったんだから喜ぶん
じゃなくて勉強するべきだよね。

「よかったねーらなちー。まあ、私は余裕で合格だけどねー」

「うん、ありがとーきて、じゃあ帰りますか！」

「あ、うん」

これ流的にボクも点数聞かれるのかなーって思ってたんだけど違うのかあ……

「かなみんは小テストどうだったのー？」

ボクが少し残念そうな顔をしているのに気づいたのか彩加さんが気を利かせたのかその話を振ってきた。

「ふふふ、実は……」

「満点なんだよねー？」

「あ、うん、そうだよ」

なんだよー！気を利かせて聞いたんじやなかったのか!!

それに知ってるのに聞くなってなんかなあ……

「悔しいかなー麗たんが一番だと思ってたらかなみんの方が高くて満点とか聞いたからねーちよつとからかいたくなっちゃった」

てへぺろとチャームアップされたがそこは別に強調する所じやないよね？

というか憂さ晴らしてて訳じやないだろうけどちよつとさっきのキツかったよ……

「まあまあ、とりあえずそろそろ行こか時間も惜しいし」

來那の鶴の一声により解散となり我が家へ向かうこととなった。

「へえ、ここが奏海のおうちね、なかなかじやない」

「そうだね、ボクもまだここが自分の帰る場所になって1ヶ月ちよつとだけど凄いところだなあとよく感じるよ」

神薙家はこの地域でもかなり大きな家を持っており敷地面積は東京ドーム2分の1個分ほどある。家というより屋敷というのが相応しいぐらいだ。

「ボクの部屋の隣が妹の部屋なんだけど妹の事は知ってる？」

「えーと、確か穹ちゃんだったかな？今年の1年生の学年次席だとか聞いてたけど」

え？そうだったの？穹って頭良かったのか?!

隣の部屋からくしゅんとかわいらしくしやみが聞こえたような気がしたが気のせいだろう。

いや、気のせいじゃないね。

既に帰宅している形跡があったし間違いないだろう。

「まあ、適当なところに座ってお茶用意してくるから」

「はーい、ありがとね」

ボクはキッチンへ向かいお茶を用意して部屋に戻ったのだがー

「ちよつと來那さん？なににしてらっしやるんですかねえ？」

來那がボクのベッドの下を漁っていた。

「え？いや、ほら、奏海もなんだかんだ言っつて男の子なんだしそーい

う本とかあるのかな？っつて思っつてさ」

「來那……そこにならえー！」

「え？な、なんでよ？」

「問答無用おお」べしっ

來那の頭を軽く叩く。

「痛っ、ちよつとなにすんのよー！」

「あのねえ來那、今は曲がりなりにもボクは女の子として女子校に通う身だよ？そんな状況でそんなもの持つたらおかしくない？そうは思わない？」

「あ、うん……ごめんね、軽率だったかも」

うんうん、反省したようだね。全く最近の子はそういうことばかり

気にしててけしからんなー！

「つまりは誰にもバレないところに隠しー」べしっ

反省の色なしだった。

「いたた……まあ、こんな茶番はこのぐらいにしてお話聞かせてもらおうかな」

やつと本題か……でも、何から話すべきなんだろうか。

「來那は何から聞きたいの？」

「あの日……奏海が急にいなくなった理由から」

「最後の日だね、いいよ」

実はボクは昔のことをあまり覚えていなかった。

その頃色々なことがあったせいでショックを受けて記憶を封印してしまっているからだと思っっている。

けれど最近になって少しずつその頃のことを思い出し始めていた。「少し記憶が曖昧だけど來那と最後に会った日の次の日家族で出かけることになってたんだ。でもその途中で事故に遭った」

「それがあの高速道路での大規模な巻き込み火災事故ね」

「ああ、ボクは全身に火傷を負ってたけどなんとか助け出された。でも、お父さんとお母さんは即死だった」

「あれ？待って奏海、妹ちゃんいたよね？あの子はどうしたの？」
「え……う？」

ボクの記憶が食い違っていた。ボクに妹なんていなかったはずだった。

なのに來那はボクに妹がいると言った。

ボクの記憶全然不完全なんだろうか……

「ごめん、当時の記憶が全部あるわけじゃないんだ……きっと來那の言う通りなのかもしれないけど今はその事が思い出せないんだ……」

「……そう、なんだね。なんかごめん」

「続きいいかな？」

「うん」

「その後ボクは近くの病院に搬送されて治療を受け普通に良くなっていったんだ。でも心の面がまだ不安定で夜な夜な泣き叫んだりしていたと思う。そんな時ボクに孤児院に行くように話が来た。ボクはよく分からずそのままそこに行くことになったんだ」

「……」

「來那？」

來那がうつむき加減で少し震えていた。

そしてすぐその理由が分かった。

「來那……急にいなくなったことほんとに悪く思ってたよ。でもボクは……」

「違うの！そうじゃないの！私が……私が言いたいのはその事じゃない！」

「來那もしかして君は……」

「奏海ごめんね、最後の日の約束奏海はちゃんと守ってたんだよね？」

「……っ!!」

「私はずっと奏海のこと疑ってたの。ほんとのこと知ったのも最近の話だし私は約束忘れられたとずっと思ってた。でも違った」

「來那……見たんだね君は」

「うん……奏海、ありがとう」

そう、これはボクと彼女が幼き日に交わした約束が果たされた瞬間だった。

その内容は至極簡単だった。

「私のあげたあの髪留め奏海はずっと持っていてくれたんだね」

「うん、よく気づいたね……もう原型とどめてないはずなのに」

ボクと彼女の最後の約束それは幼き日の來那から貰った髪留めとそれに込められた思いへの答えだった。

彼女から送られた髪留めそれは珍しいアイビーの花の髪留めだった。

その花言葉は『死んでも離れない』という意味だった。

そう、ボクと彼女はあの髪留めをずっと大事にしてきたそしてそれはどんなときも離さず持ってきたそして今もそれは大切に持っていた。

「あの日ボクと君は離ればなれになってもボクは君のことは忘れなかった。それは君も同じだろう？」

「うん、ちゃんとあるよ」

彼女の手握られているのはボクが送ったミセバヤの花の髪飾り。

その花言葉は『大切なあなた』という意味だ。

こうしてボクと來那は本当の意味で再会を果たせたんだ。

その後ボクらは昔話に花を咲かせていた。

2年それがボクと彼女と一緒にいた時間だった。

けれどその時間はとても長く感じられるほどに濃いものだったのだ。

「まだあの頃の奏海は今と違って男の子らしかったよね、髪もなんかツツンヘアーだったし」

「そ、それはおまかせでーっていつも頼んでたから」

「うーん、でも奏海すごい男の子っぽかったよ」

「そりゃ、実際男の子なんだから当たり前ー」カシヤン

話していた途中いきなり部屋の外で何かが割れるような音がした。

この家に今いるのは妹、穹だけのはずだった。

部屋のドアを開けるとすぐそこに穹が立っていた。

「そ、穹！大丈夫?!怪我しなかった?」

ボクはすぐにそこに割れて散らばる破片を拾おうとしたが穹から放たれたその一言で全身が凍りつくような感覚に襲われる。

「……嘘つき、信じてたのに……お姉ちゃん、ううん、あなたのことなんにもわかってなかった！私はバカだった、お姉ちゃんがほんとは男で性別詐称してたなんて!!」

「っーそ、それは……」

「盗み聞きは悪い事だと思っただでも興味本位でずっと聞いてた！そしてたらここに来る前のこと性別が違うってことが聞こえてきた！もう何がなんだかわかんないよ！私もうこんなのいやだよ！結局私は、私は……」

そう言い放つとそのまま走り去ってしまった。

ボクは穹に何も言い返すことが出来なかった。

事実ボクは穹に自分の本当の性別どころか自分のことを何一つ教えてはいなかった。

故に大ショックだったのだろう。

走り去る直前穹は泣いていた。

それだけボクのことを信じていたのだろう。

そしてら最後の一言の意味がボクには理解出来なかった。

穹はいったい何をどんな思いを抱えているんだ……

「奏海！そんな所で突っ立ってる場合じゃないでしょ！」

一人思考の底なし沼へはまっっていくところだったが後ろからかかる声に落ち着きを取り戻す。

「でも、ボクは……ボクはどうすれば」

「奏海、落ち着いて！そして聞いて！」

來那に両手を掴まれ目を見つめられる。

彼女の目は本気だった。

「あ、ああ……」

「奏海、あなたは今すぐあの子を穹ちゃんを追いかけなさい！私も協力してあげるから！」

「で、でも」

「これはあなたならにしか出来ないことだよ、まだ確証はないけどあの子はきつとずつと寄り添える本当の意味での家族が欲しかったんだよ。御両親ともに仕事でいない日が多いみたいだし、だからこそ今奏海が行って本当の気持ち伝えなきゃダメだよ」

「……っ！そうだね、お義母さんが言ってた穹はボクがここに来てから穹に笑顔が戻ったってー」

ボクはどうしてすぐ気づかなかったんだろうか。

穹の気持ち理解した気だけで全然理解してなかった。

「來那、手伝って欲しい！」

「うん、任せて」

ボクは最低限の必要物を持ち家の外へと駆け出した。

穹にただ一言伝えたい思いを抱いてー

穹が家を飛び出して既に1時間半経っていた。

けれど彼女は全然見つからない。

家に残してきた來那が友達に目撃情報がないかSNSで聞いてみたらしいが誰も見た人はいないという。

「くっ……どこにいるんだ、穹っ！」

無我夢中で街中探し回り疲労も溜まってきた早く見つけないと夜になってしまいそうだった。

焦る気持ち表に出すぎていたのか十字路を確認もせず飛び出してしまった。

すぐ真横に人がいた。

「しまっー」ドンっ

思いつきりぶつかってしまった。

「いてて……全くだこ見てあーっって奏海先輩？」

ぶつかった相手はボクのことを見るなりすぐ名前を言い当てる。

そしてボクもすぐに誰かわかった。

「千鶴さんか大丈夫？急いでてつい……」

「……何かあったんですか？」

「ああ、ちよつと穹がねー」

「先輩少しあつちでお話しませんか？」

なんでだよ！

こっちは急いであるというのに！

表情に気持ちが出ていたのか少し怪訝そうな顔をされたがついて来いとばかりに歩き始めすぐそばにあった小さな公園へ向かう。

「先輩ー穹と揉めたんでしよう？」

「う、うん。そうだけど……」

「いいよ私はもう分かつてるから」

なんだこの見透かされてるような感覚は……

彼女は、千鶴は何を知ってるんだ？

「奏海先輩、あなたは穹のこと好きですか？」

唐突な問だった。

けれどボクが答えるはもちろんー

「好きだよ」

「家族として好きですか？」

「もちろんだよ」

「じゃあ、最後の質問。先輩ー」

ボクは息を呑む。

「穹のこと異性としても好きですか？」

その瞬間周りの時が止まったようにも感じた。

その一言がボクの頭の中で何度も繰り返される。

「な、なんで……」

ボクはもはや声を出すことすらままならなかった。

なぜただ穹の友達であるはずの千鶴がそれを知っている。
穹が教えたとは思えなかった。

「先輩、私なんて知ってるか疑問に思いましたよね？」
今思っていることをそのまま言い当てられボクは少し怯む。

けれど彼女の言葉は続く

「先輩は覚えてないんですか……私もあなたと同じなんですよ？」
理解出来なかった。

何が同じなんだ。

頭の中で色々なことがぐるぐると回り始める。

「少し意地悪しちゃいましたかね。ほんとは私は先輩と同じ孤児院に
いたから知ってるんですよ？」

「え？君が……まさか、そんな」

「奇妙な縁もあつたものです。私は国立の家に2年前に養子として迎
えられました。先輩は1ヶ月ちよつと前に神薙の家に」

それじゃあ、彼女が最初からボクのことを警戒していたのは――

「先輩、私はあなたに会った瞬間にいつか来るだろうこのことを予見
してました。先輩、あなたの覚悟聞かせてください。そうすれば私が
あの子のいるだろう場所教えてあげますよ」

「そっか……ははは、ボクはほんとどこまでも愚か者なんだね」

小さくつぶやくその声が千鶴に聞こえたかは定かではない。

ボクは彼女に今の穹への思いを伝える！

「ボクは――」

×

千鶴から教~~えて~~もらつた場所を目指しボクは走っていた。

ボクは彼女に認められたのだ。

その思いは間違いなく本物だろうそれを伝えることが出来れば
きつと穹も報われるはず。

それが彼女の返答だった。

そしてボクは隣町にある小さな公園にやってきた。

その公園の最奥にらある2台のブランコそこに1人座る少女がい
た。

「探したよ、穹……さあ、一緒に帰ろう」
チラツとこちらの様子を覗く穹。

その瞳には今まで見てきた明るい彼女の面影はなく暗い影が落ちていた。

「よく見つけたね、こんな遠いところを」

「穹……」

彼女の肩へと手を伸ばそうとするが――

「さわらないで!!」

彼女の声にはボクは怯んでしまう。

彼女の知ってしまったことは紛れもない事実でそれはもう変えることの出来ないものだ。

彼女には初めから尊敬していた姉はいなかったのだから――

「穹、聞いてほしいんだ……ボクの本当の気持ちを」

彼女は顔を上げた。

目元は赤く腫れ上がっていた。

きつと長い間泣いていたのだろう。

そんな彼女を見るとボクまで辛くなってきてしまいそうだった。

「穹、ボクが神薙の家に来ることになったきっかけはねただの勘違いだったんだ。」

「え?」

意味がわからなかったのだろう。

それもそのはずだ。

なぜなら――

「君のお父さんはボクを一目見て女の子と勘違いして養子として迎えることにしたんだ」

「そんな馬鹿みたいな話信じられないよ!!」

「けどこれが現実なんだよ!」

そう、たったそれだけなんだ。

ボクが神薙の家に来たきっかけというものは……

「お義母さんはこのことを知ったけど誰にも言わずに隠してるんだよ? 全ては穹のために」

「……私のために？」

「そうだ、穹はボクが来てから笑顔を見せるようになったって言ったよ」

「！」

彼女が驚いた顔をしていた。

暗い影を落としていた瞳は既に本来の明るい彼女の瞳へと戻りつつあった。

「そう、かもね……私はずっとひとりだった。友達になんて作れなかった。みんな私のこと敬遠して話しかけては来ても仲良くはしてくれなかった！家じやお父さんはほとんどいないしお母さんも夜くらいしかまともな会えなかった！私は友達もいなくて家族の温かさすら知らなかった！」

彼女の本心からの言葉だとすぐに感じ取れた。

彼女の瞳にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「でも、お姉ちゃんがきて全部変わった。私はひとりじゃなくなった。家族の温かさを知り始めた。でも！それが……」

そのあとの言葉には嗚咽が混ざりもうまともに喋られなくなってしまった。

「穹、もういいよ……あとはボクに喋らせて」

ボクは軽く深呼吸をすると千鶴に話したことをまた話し始める。

「ボクは知ってる通り幼い頃に家族の死を体験した。その頃のボクは完全に壊れてた。でもボクは今はどうして普通でいられる、それはね大切なものを見つけられたからなんだ」

「たいせつなもの？」

「そう、それはここにある」

ボクは素晴らしい自分の胸に手を当てる。

「大切なもの、守りたいと思うものがここにある。ボクは心の底から失いたくないものがある。それを失ってしまったらボクはきつとボクでいられなくなる」

自分の鼓動が早くなるのを感じる。

ここから先を言うのは凄く恥ずかしい。

けれどここで立ち止まったら終わりだ、覚悟は既に決まっているんだ！

「ボクが守りたいものは穹、君と君の絆だよ」

はつとした表情を見せる穹その目は大きく見開かれボクを見つめていた。

「ボクは穹の本物の姉にはなれない、けどさそんなのは関係ないんだ。穹にとってボクが家族の温かさを感じられる存在になるんだっただだそれだけでいい」

「性別なんて関係な言っっていうの？」

穹の問はもつともなものだった。

けれどその答えも既に持ち合わせている。

「ああ、関係ないよ。だってー」

今この瞬間色々なことを思い出していた。

穹との出会いを初めは明らかに避けられていたことそして今日みた彼女の寂しそうな泣き顔を……

「だってボクは穹の事が好きだから！心の底から大好きだって言えるから！」

「……あ」

穹の唇が動かけれど声にはなっていなかったその言葉をボクは確かに受け取った。

「穹、ボクはもう二度と君を一人にはさせない。絶対に神にだって誓えるよ」

その瞬間穹の涙腺が崩壊した。

子供のように泣きじやくる穹の頭を軽く抱き撫でる。

これで良かったのだ。

例えこの思いが歪んでいたとしてもそれはボクの中で正しいと思えるのならそれでいいんだ。

その後数分穹は泣き続けボクは穹の頭を撫で続けていた。

「ごめんね……私ずっと遠回りしてたんだね。お兄ちゃん」

「ははは、お兄ちゃんは二人だけの時にしてよ？ボクが女の子として振る舞うことにはかわりないんだから」

「うん、わかったよ」

ボクと穹の問題はこれで完全に解決した。

それは神薙家における大きな変化となることを間違いないだろう。

「穹、おうちに帰ろ」

「うん、でも少し待って」

「ん？どうした？」

「お姉ちゃん少し屈んで？」

「ん？こうかな？」

ボクが軽く屈むと首に手を回されそのまま頬に柔らかかな何か
がー

「え、ちよ、穹さん?!」

「あはは、お兄ちゃん！だーい好き!!」

「全くませてるなあ…まあ、いいや」

「手、繋いで帰ろ？」

その間に無言で行動で答えボクらは家路へとついた。

何かを忘れてるような気がしたけど気にしない。

そしてそんな二人を影から覗いていた人物がいたこととしてそれから
からもたらされるものがまたひと波乱呼ぶことになるがそれはまた
別のお話。